

NEWS LETTER KUMAMOTO

2019.Spring Vol. 116

■発行: 一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団
〒860-0806 熊本市中央区花畑町 4-18 熊本市国際交流会館
■Publisher: Kumamoto International Foundation
4-18 hanabata-cho, chuouku, kumamoto city, 860-0806
TEL: 096-359-2121 / FAX: 096-359-5783
e-mail: pj-info@kumamoto-if.or.jp URL: http://www.kumamoto-if.or.jp/



《特集》 世界をよく知るセミナー テーマ「ロヒンギャ難民」



世界をよく知るセミナーでは毎年、ニーズにあった関心が高いテーマを取り上げ、セミナーを開催し、市民の国際化への理解を促す事業として行っています。今年も6月16日(土)に熊本市国際交流会館にて開催しました。

テーマは、皆さんもニュースなどでよく耳にされたと思いますが、「ロヒンギャ難民」について取り上げました。このセミナーでは、実際に避難民と接し人道支援活動をされた益田充氏(日本赤十字和歌山医療セン



《報告》 平成30年度 外国人向け防災訓練報告

ター医師)を講師にお招きし活動内容をお話しいただき、後半では、益田氏に加え、イギリスの大学で平和学を研究された田辺寿一郎氏(熊本大学大学院先端機構特任助教)、当事業団の多文化共生アドバイザー羽賀友信氏(新潟県長岡市国際交流センター長)の3名によるパネルディスカッションを行い、それぞれの視点から「難民問題」について意見を伺いました。

今回は、難民についての知識を交えながら、セミナーの報告をさせていただきます。

《特集》

世界をよく知るセミナー
「ロヒンギャ難民」報告・・・P2~P4
日本赤十字和歌山医療センター医師 益田 充氏
熊本大学大学院先端機構特任助教 田辺寿一郎氏
新潟県長岡市国際交流センター長 羽賀 友信氏

平成30年度
外国人向け防災訓練実施報告・・・P5

目次

Contents

世界の国々から～メキシコ～・・・P6
「そうだ、メキシコに住もう！」
モンテレイ大学日本語講師 泉 千草さん

世界を知る～It know the world～・・・P7
国際協力推進員 赤星 亜朱香さん

教えてください!先生!/きふプロ
平成30年度賛助会員・・・P8

第1部基調講演「 Bangladesh 南部避難民支援活動に参加して 」

益田 充氏（日本赤十字和歌山医療センター医師）

1. 活動の経緯

「医者として、紛争や災害に困っている人を助けたい！」

そう思い立って15年ほど経ち、今は日本赤十字社和歌山医療センターにて医師(外科医/救急医/精神科医)として働いている私ですが、今年1月から2月にかけてようやくその活動の機会を得ました。

場所は、Bangladesh 南部の避難民キャンプ。平成29年8月に、Myanmar 西部のラカイン州で起きた暴動により、隣国 Bangladesh に多くの避難民(いわゆる「ロヒンギャ難民」)が流入し、同地域で必要な医療を受けられない人々が急増してきたため、日本赤十字社(以下「日赤」)を含む赤十字医療チームが活動を開始しました。



2. 活動内容

私個人としては、仮設診療所等での診療が中心であったため、外科医というよりは「赤十字診療所の街医者」というようなイメージの活動になりました。

まず目立ったのは、多くの感染症(ジフテリア、麻疹、水痘、ムンプス、百日咳、結核、肝炎など)疑いの患者さんでした。あとで統計をまとめていて気付いたのですが、その多くが日本ではワクチンで防げるようなものでした。これは住民の半数近くがワクチン未接種の小児であったことにもよります。やはり、社会情勢が安定しないと、日本人では当たり前を受けられるような医療サービスすら届かないのかと、思い知らされました。

また、外傷(主に陳旧性の銃創や骨折など)の診療や、膿瘍の小手術(局所麻酔例 30 件ほど)などでは、外科医としてのスキルが役立つ場面もありました。中には数か月前の外傷の痛みを今もなお訴える人もいて、Myanmar でのつらい経験による心理的影響もあると思われ、同行していたところのケアチームと協働して対応していきました。

さらに、日赤スタッフ・Bangladesh 赤新月社ス

タッフ・そして避難民からなるコミュニティボランティアが、一体としてチーム医療にあたるように、国際人道法をふくむ赤十字原則の教育なども継続しました。その成果か、帰国時には避難民ボランティアより「家族のようなスタッフで、我が家のような診療所でした」というメッセージを頂くことができました。ただ、彼らが本当に落ち着いた生活と将来を手に入れるまでは支援の継続が必要です。

日本人は宗教的にも歴史的にもあまり関わりが無いところかもしれないが、自分に関係ない話ではないということ、自分に近い話だということを知ってほしい。アルジャジーラなどイスラム系では2日に1回はロヒンギャ難民のことをトップニュースにするほど熱心に取材をしているが、日本からの取材はあまり無いのが現状です。私も追加派遣の要請があれば再訪するつもりですが、皆さまにも引き続きのご注視ご協力をお願いしたいと思います。

3. 活動して気づいたこと

「私は医者じゃないから、何の役にも立てないのでは？」

このようなご質問をあちこちで受けますが、実際に私もそう思って医者になったのですが、いざ現場に出てみると、医師・看護師以外の非医療職の役割は非常に重要であることが分かりました。

例えば、キャンプ内で医療活動を展開するにあたり、テントの設営・水の確保・トイレや下水道の準備・運



転手や通訳の手配など、いわゆるロジスティックスという役職が不可欠であり、彼らのお陰で医師としての仕事に専念できたことを、帰国してレポートをまとめている中でようやく気付くことができました(それぐらい彼らの仕事ぶりは自然だった、ということです)。

また、そもそも対立する勢力の双方に連絡を取り合い、不安定な社会情勢の中にも丸腰のスタッフを送り込んで安全に活動させるため、日赤や国際赤十字には交渉や危機管理専門のスペシャリストが数多くいるのですが、彼らの存在があるからこそ日赤は今まで一度も派遣中の死者を出さずに済んでいるのだということ、身をもって実感しました。

そしてそのようなスタッフのバックグラウンドは、土木や機械といった理工系はもちろん、国際関係・法務・人事・広報・営業・経理などいわゆる「文系」の人たちも多く、言ってみれば「プロであるならば誰でも」活躍のチャンスがあるのだと分かりました。皆さまも、ぜひ今までの道のりの延長線上で、このような現場での「プロフェッショナル」としての新たな可能性を見出してみられてはいかがでしょうか？

4. 夢をかなえるためのキャリアアップ戦略

「まだ僕はプロと呼べるようなものはとても…」という若い皆さまへ、参考になればと思い私の話をします。

私の場合は、やりたいことが見つかったのが大卒後26歳の時。その時点で年齢的でもかなりハンディがあるとは思っていましたが、それでも一度きりの人生、やらないと面白くないと28歳の春に医学部へ再入学しました。そこからは最短距離で行きたかったので、ちょうど今のように現場で活躍する自分を想像し、そのために必要な資格やスキル等を逆算していきました。

例えば、そもそも難民支援の現場では、外科系の医師は「すべて切れないといけない」と教わりましたが、具体的には「外傷とお産」ができないといけないので、関連する専攻は一般外科・整形外科・産科・救急科など多岐にわたります。その中でまずはどこの科をメインで専攻するか選ばないといけないのですが、ある外

科医に「脚は切れますか」というとイエスとの返答、ある整形外科医に「お腹切れますか」というと渋い返事。また自分のいた職場ではそもそも救急科では手術できないと。そんなわけでまずは外科医から始めることに。(たまたま産科は、理解ある施設の協力を得て同時研修することができましたが。)

もちろん医師というものは(その他の職種もそうでしょう)たいてい自分の専門が一番と思っているので、それ以降もいろいろな意見をい

ただしましたが、迷ったら「自分がこの人になり替わったら、自分の思う仕事ができるだろうか？」という視点から、取捨選択していきました。そして、今ひと仕事終えてみると、自分のキャリアアップ戦略のおかげで多くの患者さんを救うことができた実感できるので、この選択は正しかったのではと実感しています。

ですので、若い皆さん、

- ・まずは目指す自分の理想像をイメージする
- ・そのために必要なことを逆算して準備する
- ・迷ったら「自分がこうなりたい」と思える人の意見を採用するという戦略を、私からはお勧めします。



第2部 パネルディスカッション 「なぜこんなに多くの難民がでてくるのか？」

■難民とは？

「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいると迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れたひ人々」

(1951年の「難民の地位に関する条約」より)

■難民の状況

難民問題が注目されるようになったのは、ロシア革命、オスマン帝国崩壊などにより、難民が急増した第一次世界大戦以降です。その後、第二次世界大戦中にホロコーストが起き、難民を保護する機運が高まりました。そして1950年にUNHCRが設立され、1951年に難民条約がつけられました。現在、難民が多く発生している国は、シリア、アフガニスタン、南スーダン、ロヒンギャ(バングラデシュ/ミャンマー)などです。

シリア難民の受け入れ国を見た場合、トルコ、ヨルダン、レバノンなど、豊かではない途上国が近隣の国家として受け入れざるをえなくなっていますが、その受け入れ能力は限界を超えています。難民への直接支援のみならず、受け入れ国への支援が重要な課題となっています。

■なぜ難民が発生するのか

国際的 NGO である国際危機グループ(International Crisis Group)によると、主に5つの原因があるといわれています。その5つとは、「宗教的・人種的・政治的迫害」、「戦争・紛争」、「ジェンダー・性的迫害」、「飢餓」、そして「気候変動」である。最初の原因について、宗教・人種あるいは政治思想の違いによって迫害を受ける結果、難民となり自国を離れざるを得るケースがあり、例えば、ミャンマーのロヒンギャ難民、パキスタンのヒンズー教徒が挙げら

れます。次に、難民の歴史の中で最も難民を生み出す原因が戦争・紛争です。シリア内戦による難民が好例ですが、シリア内戦以前では、イラク戦争やアフガン戦争によって発生した難民が、この部類に入ります。3番目の原因については、まだそれほど世界的に認知されてはいませんが、国際連合難民高等弁務官事務所は、LGBTの人々が殺害、直接的暴力、性的暴行、拷問、恣意的拘束の対象となっているとして、2012年に難民に関するガイドラインを改訂し、新たにジェンダー難民を含めることとしました。4番目の原因である飢餓については、干ばつや戦争などによって深刻な食糧不足に陥り、自国を離れざるを得なくなった人々が存在することを示します。実際、ソマリア、南スーダン、ナイジェリア、そしてイエメンの4か国で、合計約2000万人の人々が深刻な干ばつに見舞われており、その多くが安定した食料確保を求めて自国を離れて難民となっています。気候変動と難民については、まだ公式な気候変動による難民は出ていないが、今後約80年のうちに、海岸沿いに住む人々約1300万人が気候変動難民になると予測されています。



■問題解決に向けた取り組み

国連は解決の方法として3つの提言をしています。

- 1 平和になった母国に帰ること（紛争、人権侵害を解決することは難しく、平和秩序が回復されても国として必要なインフラの整備には時間がかかります）
- 2 一時的に避難した周辺国での定住（周辺国での受け入れには限界があります）
- 3 別の国での定住＝第三国定住（日本が行っている支援の一つです）

■日本の難民受け入れ

日本では、1970年代後半以降、インドシナ三国（ベトナム、ラオス、カンボジア）からボートピープルを1万人以上受け入れました。そして1981年に難民条約に加入。2010年に第三国定住による難民の受け入れを開始しています。

難民申請については、2017年は1万9,628人から申請がありましたが、認定されたのは20人でし

た。難民認定は入国管理局が担っており、保護というより管理という視点が強くなっています。国際基準に比べ、難民の認定基準、公平性、透明性を確保した手続きの基準、難民の受け入れ体制などが不十分だといわれています。難民問題に対する日本社会の理解が十分に進んでいないことも大きな原因です。

■未来へ向けて

人が尊厳と希望を持って生きられるようにするためには、人とつながり、働き、教育を受ける権利が重要です。今、私たちに問われているのは、多様性を新たな価値として受けとめる寛容さです。

私のアフガン人の難民の友人は、大学を出て、大学院は留学し、現在、国連で働いています。もう一人の友人は、大学を出た後、日本の奨学金で博士課程まで修了し、現在は大学に勤務しながら祖国を支援しています。

教育は人権の中でも最も大きな可能性を持ったものであり、彼らが自立して希望をかなえる一番の可能性だと思えます。今、日本の姿勢が問われています。

今回、セミナーのテーマに「難民問題」を取り上げた背景には、世界的課題の1つであり、そこに日本も含まれているということを私達日本人が知るためです。たしかに、日本にいと、縁のない問題として関心を持たない人たちが多くいますが、現在、避難民は全世界で6,850万人に昇り今後も増加するだろうと予測されます。これは日本にとっても大きな課題となります。今回のセミナーには学生など若い方の参加もあり、また、半分以上の方が、このセミナーに興味があったり、知識を広めたいという理由で参加していただきました。少し難しいテーマでしたが、実際に現場で支援活動した人の話を聞き、世界の現状を知ることで、参加された皆さまにとっても視野を広げる機会に繋がってくれたのではないかと思います。また、今回のセミナーを通して難民問題は「他人事ではない」ということを少しでも意識していただけたら幸いです。



平成30年度 外国人向け防災訓練実施報告

私達、熊本市国際交流振興事業団では、毎年外国人向け防災訓練を実施しています。今回は特に新たに入学した外国人留学生と技能実習生を対象に開催しました。

まず、熊本市が作成した熊本地震復興DVD（英語）を視聴し、熊本地震時の被災状況及び復興への取組を映像で学びました。熊本地震を体験していない留学生・技能実習生がほとんどだったので参加者の皆さんは真剣に見入っていました。熊本地震を体験した私達も当時の記憶がよみがえり、地震の怖さを再認識しました。このDVDには現在の熊本の復興への取り組みも紹介されており、熊本市内の被災直後の状況から2年後の現在、街中や熊本城の復旧・復興状況を映像でみることができ、改めて復興には長い年月が必要だと痛感しました。

その後、仙台市国際交流協会の「多言語防災ビデオ・ダイジェスト版地震に備えよう・地震がおきたら」を視聴し、地震への備えの基本を学びました。今回は英語版を使い、地震時の初期対応、津波での避難方法の基本を学びました。このビデオを通じて熊本地震ではなかった津波の怖さや、津波警報がでたらまず高い場所へ避難する重要性を学ぶことができました。

休憩の後、熊本地震を体験した熊本大学留学生グループ「KEEP (Kumamoto Earthquake Experience Project)」メンバーである、ミャンマー出身のカインさん、パプアニューギニア出身のフランススさんより熊本地震での体験を話していただきました。

カインさんは熊本大学薬学部部に所属しており、熊本地震被災時は研究室で日本人学生と共に研究だったそうです。地震の揺れが収まったのち、研究室のメンバーと一緒に熊本大学の体育館へ避難し、そこで数日すごしたとのこと。一番困ったことは被災当初は英語などの情報が少なく、状況が分からなかったことだと話されていました。その後、留学生が多く避難していた熊本大学黒髪キャンパス体育館へ避難し、留学生仲間と話すことで大変気持ちが楽になったと話されていました。

フランススさんは熊本地震被災時（前震）自分のアパートにおり夕食の準備をしていたそうです。アパートが大きく揺れ何が起きているのか分からず、ガスをつけたまま外へ飛び出してしまい、後でそれが大変危ない行為だと気づいたとのこと。しばらくし隣に住む日本人が片言の英語で話しかけてくれ、日本の避難所のことや、食料配給のことなどを教えてもらい大変助かったと話されていました。その後、アパートの隣人達と近くの公園へ避難し数日過ごしたのちに熊本大学黒髪キャンパス体育館へ移動し、他の留学生と合流されたそうです。

二人が熊本地震で気づいた最も重要なことは、住んでいる地域やそこに住む日本人と繋がること。普段から地

域の日本人住民とつながるように地域で開催される催し物に積極的に参加し、顔見知りになっておくこと非常時に大変助けになるし、普段の生活も楽しいものとなると話されていました。

これまで視聴したDVDや体験談等の話を基に、簡単な地震時での必要な行動を学ぶ防災クイズを実施しました。この防災クイズでは実際の熊本地震でのNHK等テレビでの地震速報の映像、緊急地震速報のサイレン等を流し、緊張感を高める工夫を行い実施しました。日本人にとっては普段の防災教育等で知っている基礎的な問題でしたが、外国人参加は真剣な表情で回答していました。

その後、NPO法人ソナエトコの協力で防災士である高千穂さんより地震以外の災害（台風・大雨・洪水等）への備え、減災の取組等の講話をしていただき、地震以外の防災知識学びました。

また、開催に伴い、2階交流ラウンジ内に熊本市中央区役所総務企画課防災班より提供いただいた、避難グッズ（簡易トイレ、アルファ米、持ち出し用バッグ等）をお借りし、展示を行うとともに参加者へ提供品として非常食（サバ缶）と非常用ホイッスルを提供しました。

今回の防災訓練には災害時多言語サポーター9名も参加され、講話やクイズでの通訳、参加した外国人からの質問への対応、参加者を避難者と想定しての聞き取り訓練等も行いました。

本年度も各外国人コミュニティ、熊大留学生会（KUMISA）、くらしのにほんぐらぶと協力し広報を行った結果、22名の外国人参加者があり、そのうち14名は熊本大学の留学生、8名が技能実習生（中国）でした。留学生等は数年である程度入れ替わる為、今回のような基礎防災講話・訓練を年1回は開催する必要性を感じました。KEEP (Kumamoto Earthquake Experience Project) のカインさん、フランススさんの話にあっており、自分達の住んでいる地域の避難所の位置確認の重要性や近隣日本人住民との関係が如何に重要か留学生や技能実習生に知ってもらおう大変よい機会となったと思います。

今回の防災訓練案内についてもKEEPが防災訓練の重要性を認識し、様々な関係者に防災訓練を案内してくれました。今後も外国人コミュニティとの連携強化すると共に、平時からの外国人が必要とし楽しめる生活情報等の提供、多言語相談のPR等国際交流会館多文化オフィスの活動等をさらに知ってもらい、利用してもらうことでネットワーク強化に努め、地域と外国人コミュニティを繋ぎ地域の防災訓練や地域イベントに外国人住民が参加しやすい仕組み作りを行っていきたいと思います。

そうだ、メキシコに住もう！

モンテレイ大学日本語講師
泉 千草さん
(メキシコ在住)



私は今、メキシコ北部のモンテレイという都市にある、モンテレイ大学（以下、UDEM）で日本語を教えています。こちらに住んでまだ2か月ちょっとなのでネタは少ないですが、まず、なぜメキシコなのか、また、どんな仕事をしているかについてお話しします。

以前、2年ほどアメリカで日本語を教えていたのですが、そのアメリカ生活の間に、私の中で急激に存在感を増してきた国が、メキシコでした。日系企業の進出に伴って、日墨間の直行便も就航し、カンクン等のリゾート地に旅行する日本人も増えていますが、まだメキシコについてよく知らない人が多いと思います。私自身、全く興味もありませんでしたし、ハリウッド映画等の影響で、マフィア抗争や不法移民など、マイナスイメージばかり持っていました。しかし、アメリカで出会ったメキシコ移民たちは、陽気で親切な人たちばかりで、私が持っていたイメージと違い驚きました。また、日本にいと韓国や中国の文化に接する機会が多いように、アメリカでも食べ物や音楽など、メキシコ文化を折に触れて感じます。段々とどんな国なのか興味が湧き、帰国してからも、行ってみたいと思うようになりました。

日本語教師という仕事の最大の利点は何かと聞かれて、私が思うのは、やはり「違う国に住みたい」と思ったら割と簡単に実現できてしまうこと。メキシコへの興味が湧いた私は、新潟の長岡技術科学大学と UDEM の工学部が実施する「ツィニングプログラム」を知り、すぐ応募しました。このプログラムは、エンジニアを志す UDEM の学生に2年半日本語を教え、編入試験に合格したら長岡に留学、卒業時には両大学の学位を与える、というもの。学生は自分の専門の勉強と並行して日本語クラスをこなさなければならず、かなりシビアです。直接法といって、他の言語を使わず、「日本語で日本語を教える」方法をとるので、途中で脱落する人も少なくありません。しかし、それでも残って勉強を続けている学生たちはみんな熱心で、質問や発言も活発にするし、日本語が好きだという気持ちが伝わってきます。私たち日本語教員は、そんな学生たちを時に優しく、時に厳しくサポートします。両大学の仲介者的な役割もあり、業務は多岐にわたります。新任なので日々失敗ばかりですが、将来、日墨の懸け橋となって、両国のために活躍するエンジニアたちを育てるこのプログラムに関わることができ、自分も教師として成長するチャンスだと、わくわくした気持ちで臨んでいます。

さて次に、メキシコ生活で感じていることについてお話しします。

バス停に時刻表がないこと、民族音楽を爆音で流しな

がら荒い運転をする車が多いこと、朝早くから夜遅くまでみんな元気なこと、サボテンを食べること…など、驚いたことはここではとても書ききれませんが、モンテレイに着いて最初に思ったのは、「これがメキシコ？」でした。それもそのはず、モンテレイは米国境から2時間半位なので、アメリカ文化の影響が南部に比



《アパートから見えるラスミトラス山とサンペドロ》

べて強く、米企業もたくさんあります。また、私が住むサンペドロ地域は中南米でもトップクラスの富裕層の街だそうで、メディアで目にするメキシコとは違った姿が見られます。UDEM もサンペドロにある私立大学で、幼い頃からバイリンガル教育を受けている学生が多く、みんな英語がペラペラです。学生や先生たちとのコミュニケーションは英語で大丈夫なのですが、ひとたびキャンパス外に出ると、英語はほとんど通じません。私はスペイン語ができないので、いつも、¿Habla inglés?（英語を話しますか?）と合言葉のように聞くのですが、答えは大抵 No。四苦八苦しなながら、カタコトのスペイン語で意思疎通を図っています。そんな中で感じるのは、言葉と情報の大切さ。熊本市国際交流会館では、来日後間もない外国人に基礎的な生活日本語のコースを提供していて、私もそこで教えていたのですが、その職を離れ、自分自身が言葉の不自由な情報弱者の立場になった今、日本で生活する外国人の方々の気持ちがよくわかりました。多言語での情報提供はあるか、災害等の緊急時にはどうなるのか…など、日本ではあまり意識していなかったことが気になり、行政やコミュニティの外国人サポートの大切さを痛感しています。また、ネット上でも圧倒的に日本語での情報が少ないので、私もブログを始める等、メキシコに関して情報発信をしていこうと思っています。言葉の壁は大きなストレスですが、メキシコの人々はフレンドリーで優しく、バスの中でも、お店でも、困っていると助けてくれます。どの家も道に面してポーチがあり、夕涼みをする人たちが多いのですが、アジア人が珍しいからか、歩いているとよく Hola!（やあ!）と声をかけられます。スペイン語は文法に細かいルールがあり難しいのですが、早く覚えて、近所の人やお店の人と会話ができるようになり、コミュニティの一部になりたいと思っています。



《本場のタコス。色んな種類があります》



《アボカドは完熟も青いのも両方あって便利!》



世界を知る ～It know the world～

このページでは、「世界を知る」をテーマに独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流・協力分野で活躍している皆さんのご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介します。

「はじめまして！」

国際協力推進員 赤星 亜朱香 さん

(2013年7月～2015年10月 青年海外協力隊 東ティモール派遣 職種:栄養士)
(2016年7月～2018年7月 シニア海外ボランティア ミクロネシア連邦派遣 職種:栄養士)

2018年10月より JICA デスク熊本の国際協力推進員として着任しました赤星亜朱香(あかほしあすか)です。熊本市に生まれ育ち、県内の大学を卒業後、京都の大学院に進学しました。修士課程修了後は、母校の大学で栄養士・管理栄養士の養成に従事しました。栄養士として第一線で働く卒業生などを見ているうちに私も栄養士として働いてみたいと思うようになり、2013年7月から青年海外協力隊の栄養士として東ティモール民主共和国で二年四か月間活動しました。

東ティモールにいたと話す「危なくなかったの?」と聞かれることが多いのですが、独立後十数年の月日が過ぎていること、元々争いを好ま



《ディリ県の栄養士たちと一緒に》
(東ティモールにて)

ないティモールの人々は外国人に対しても親切で友好的だったため、危険な事や嫌な思いをしたことはありません。外国人と交流を持ちたい若者も多く、道端で出会った初対面の人と10分くらい話したことも一度や二度ではありません。東ティモールでの主な活動は妊産婦と乳幼児の栄養改善(栄養不足の改善)に関するものでしたが、一方で生活習慣病に関する話もちろはらと耳にするようになりました。そうすると、今度は途上国で生活習慣病が問題になっている国で活動してみたいと思うようになり、帰国後すぐに次のボランティアに応募しました。

幸運にも再び海外ボランティアとして活動する機会を得、2016年7月～2018年7月までミクロネシア連邦のポンペイ州で活動しました。ミクロネシア連邦は第二次世界大戦前に日本に委任統治されていたという歴史的背景もあり、日系人が多く住んでいるだけでなく、シドーシャ(自動車)、ナスピ(茄子)やサルマタ(ズボン)など多くの日本語が現地語化していました。ミクロネシアは自生する食べられるものが豊富で、(とくに女性は)太っている方が美しいとされる文化でした。主な食べものが地場産のものから輸入食品に変わっても食べる量は

変わらず、そのため生活習慣病が増加していました。

東ティモールもミクロネシアも海に囲まれた島国だったため、どちらの国でも海を満喫することができました。シュノーケリングで見られる色とりどりの魚や、離島に泊まった時に見た星座を見分けられないほどの満天の星は忘れることができません。また離島に水道や電気はありませんでしたがその不便さを感じることはなく、逆に最低限必要なもので本当の意味で「シンプルに生きている」姿に感動しました。そして、自分の生きる力のなさも痛感しました。

二つの国での経験を通して感じたことは「栄養を考えたながら食事ができることの贅沢さ」でした。日本では、基本的には誰でもいつでも食べ物を選ぶことができますが、海外にはそうではない国がたくさんあります。理由は、栄養に関する知識がないだけでなく、購入するための十分なお金がない、そもそも入手可能な食材や食品の種類が少ないなど様々でした。

そして、もう一つ考えたことは「国際協力の在り方」でした。途上国への開発援助というと、日本や欧米の価値基準に近づけようとするものが多い印象があります。しかし、それですべての国や地域が幸せに近づいているのかと考えると、疑問が残ります。今こそ、それぞれの国や地域に適した開発を考えた援助や支援が必要ではないかと考えるようになりました。

今回、幸運にも帰国後再び国際協力に携わるチャンスを得ることができました。熊本と世界をつなぐお手伝いをしながら、国際協力や援助のあり方についての自分自身の疑問とも向き合っていきたいと考えています。今後は、熊本にいながら海外の事を知ったり、世界とつながったりできるイベントを企画していきますので、多くの方にご参加いただくと嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします!



《カウンターパートと一緒に》
(ミクロネシアにて)

教えてください！先生！

出入国管理編

(監修)

熊本県行政書士会 国際部会
行政書士 野々口瑞穂 さん

Q.「留学生として日本に来ています。日本で就職したいのですが、ビザの切り替えはどのようにしたらよいですか。

A. 在留資格として考えられるのは、「技術・人文知識・国際業務」です。この在留資格に変更する方法としては2つ考えられます。留学生の在留資格がある間に就職が決定している場合とそうでない場合いです。既に、就職が決まって、卒業と同時に就職できる場合は、留学生から「技術・人文知識・国際業務」への在留資格の変更手続きをすることができます。
また、就職先が決まっていない場合は、就職先が決まるまでの間、特定活動という就職活動のための在留資格が必要になります。この在留資格を取得して、就職活動をするようになります。(その際、大学等から入国管理局への推薦状が必要になります。)
そして、就職が決まれば、「技術・人文知識・国際業務」に変更することになります。

きふプロ

インターンシップ生、サポートセンターボランティアの皆さんが綴るKIFのアクティビティ

インターネットではもっとたくさん紹介しています。
<http://blog.goo.ne.jp/kifblo>

皆さん、こんにちは。

私は、国際交流会館にインターンシップでお世話になっている渡邊です。最近暖かくなってきて過ごしやす季節となりました。

先日、国際交流会館にて「アートフェスティヴォ」が行われ、私は記録係として手伝いました。

ホールでの公演で、世界の生の音楽を体験する事ができました。

「アートフェスティヴォ」とは、文化芸術振興と中心市街地活性化、アーティストの発掘、地域との親睦交流の促進を目的として実施されているイベントです。その中で行われる「チャレンジ部門」と「一般部門」どちらも見させていただきました。その中でも特にスペインのフラメンコ

がとても印象深かったです。タップの足さばきには圧倒されました。TVなどで見ることはあっても実際に目の前にして生のフラメンコを見る機会はなかなかないので面白く感じました。そして良い経験になりました。

皆さんも是非今後行われる「アートフェスティヴォ」の公演を鑑賞してみてください。



☆平成30年度賛助会員募集！☆

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団では賛助会員を募集しています。当事業団の活動にご理解とご支援をいただくと共に、さらなる国際交流や国際協力の輪が広がることを願っています。

会員の方々には、事業団の機関誌『ニュースレターくまもと』の送付や様々な情報の提供をさせていただきます。

- ①個人会員 一口 2,000 円/年(一口以上)
- ②団体会員 一口 10,000 円/年(一口以上)

平成 31 年 3 月までの会員期間となります。

<入会のお申し込み・お問い合わせ>

一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団事務局
〒860-0806 熊本市中央区花畑町 4-18 熊本市国際交流会館
TEL:096-359-2020 FAX:096-359-5783
E-mail:ad-info@kumamoto-if.or.jp

継続・新規ご加入 ありがとうございます。

(平成 30 年 3 月 31 日までにご加入いただいた皆様)
【個人】50 音順 (敬称略)

- ・石渡 豊美 ・鬼木 泰永 ・近藤 美紀 ・長野 稔 ・守川 照光
- ・岩崎 淳一 ・川上 絹子 ・竹下 真治 ・橋村 俊也
- ・内山 和代 ・倉田 秀樹 ・中西 竜男 ・松倉 裕二

私たちは熊本の国際交流活動を応援しています！

【法人会員】

- ・(一財)熊本市駐車場公社 ・アジア希望キャンプ機構
- ・熊本学園大学 ・熊本シティエフエム ・熊本日独協会
- ・熊本日米協会 ・崇城大学 ・ホテル日航熊本
- ・有限会社パラカロ



- 阿蘇くまもと空港より 車で 45 分
- 熊本交通センターより 徒歩 3 分
- 熊本市電停花畑町より 徒歩 3 分

from Aso-Kumamoto Airport-
45minutes by car
from Kotsu Center-3minutes walk
from "Hanabata-cho"
tram stop-3minutes walk

熊本市国際交流会館 国際交流サポートセンター

開館時間 午前 9 時～午後 8 時

多文化共生オフィス TEL:096-359-4995 (直通)

休館日 第 2・第 4 月曜日、年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)

Civic Support Center for International Exchange and Cooperation
Kumamoto City International Center
Service Hours 9:00a.m.-8:00p.m.
Multicultural affairs office Phone:096-359-4995(Dial-in)
Closed: 2nd and 4th Mondays of each month, Dec. 29th-Jan. 3rd

★平成 27 年 10 月 1 日より交通センター付近は熊本城ホール建設工事中です。シンボルロードが臨時バスターミナルとなっています。